

ワンネーション・レーバーに関する考察

渡 辺 容 一 郎

- I. はじめに
- II. ワンネーション・レーバーの内容と特徴
- III. ワンネーション・レーバーの背景
- IV. おわりに

I. はじめに

「ワンネーション・レーバー」(One Nation Labour)とは、イギリス労働党のエド・ミリバンド (Ed Miliband) 現党首が二〇一二年党大会演説で初めて明らかにした、「ポスト」ニュー・レーバーの新しい基本路線である。

ワンネーション・レーバーに関する考察(渡辺)

二七(二五七)

前回二〇一〇年総選挙における労働党の得票率は、同党史上戦後ワースト二位という結果に終わった⁽¹⁾。そして、その数か月後に実施された野党・労働党の党首選挙では、周知のように、兄で対抗馬のデーヴィッド・ミリバンド (David Miliband) を弟エドが僅差で制し、ブラウン (Gordon Brown) の後継党首に選出され今日に至っている。それゆえ、二〇一五年五月の実施が予定されている次期総選挙までにエドが労働党をどのように再建していくか、注目が集まっている。また、最近の世論調査結果⁽²⁾を見る限り、次期総選挙で労働党が政権を奪回する可能性も出てきた。したがって、ワンネーション・レーバーを考察する意味はそれなりに大きいと言っても過言ではない。

ところで、元来「ワンネーション」という概念は、どちらかと言えば保守党側の論理、もしくは政治思想として用いられたり、理解されたりすることが多かった。とりわけ一九世紀の保守党政治家ディズレーリ (Benjamin Disraeli) 元首相の保守主義理念は、後世の歴史家や政治学者によって「ワンネーション保守主義」(One Nation Conservatism)⁽³⁾ として評価されることが多い。あたかも「保守党の考え方を盗んだ」かのような「ワンネーション」レーバーとは、どのような内容であり、また、その特徴や登場の背景はどういう部分に求められるのであろうか。

このような問題意識に基づき、本稿は、ワンネーション・レーバーを知るうえで欠かせない二〇一〇年労働党党首選挙結果なども踏まえ、エド党首によって示されたワンネーション・レーバーの本質を多方面から考察していくことにしたい⁽⁴⁾。

II. ワンネーション・レーバーの内容と特徴

(1) 二〇一二年エド・ミリバンド演説の概略と評価

二〇一二年労働党年次党大会でのエド・ミリバンド党首演説（以下ミリバンド演説）は、同年一〇月二日、マンチェスターの会場にて行われた。ミリバンド演説（全文）の概略ならびに内容構成は、「自身の経歴とロンドンオリピック成功の意義」「デイズレーリについて」そして「ワンネーション国家構想」という三つの部分に大別できる。

先ず、移民そしてユダヤ系の流れを受け継ぐ自らの「バックグラウンド」を紹介した後、自分たち家族を受け入れてくれたイギリスの寛容さに感謝するため、政治家としてイギリスに恩返しをしたいと述べている。さらに、イギリス人の潜在能力の高さを示す事例として、同年夏に開催されたロンドンオリピックの成功についても語った。エドによれば、これはイギリスが「一つの国 (a country)」として団結し協力した結果であり、労働党の精神も実はここにあるとされている。ワンネーション・レーバーを説明するための「導入部」として、国民的団結と連帯を、そして何より「党首」個人の私的 narrative (物語) を分かりやすく強調している点が注目される。

続いて、かつてその党大会会場の向かい側に建っていた自由貿易会館 (the Free Trade Hall) でおよそ一四〇年前に演説し、自分と同じ野党党首の立場から「イギリスのヴィジョン」を表明した保守党政治家・デイズレーリについて語っている。エドの解釈によると、そのデイズレーリ演説には「愛国心・忠誠心・大義への献身」が見られると同時に、我々が直面する困難を皆で共に乗り越えていく姿勢にも重点が置かれていた。これが「ワンネーション」の精神であり、かつてファシズムに対抗したチャーチル (Winston Churchill) も、戦後の再建に関してはアトリー (Clement

Atlee)も、この精神を持っていたとされる。そしてエド自身も、この精神を当然信じてと訴えている。党派を問わず一応歴史的評価の高い「党首」や「首相」を例に挙げたことで、「労働党がその基本方針に『ワンネーション』を用いても不思議ではないし違和感もない」という印象が世間に広がったと考えられる。同時にそれは、ワンネーション・レーバーという考え方がエド「党首」個人のイニシアチブやリーダーシップから発しているという印象を広める効果もあつたと言えるかもしれない。そしてこれらの内容を踏まえたくうえで、最後に、同演説の本題とも言うべき「ワンネーション国家構想」の詳細に入っていくことになる。

このミリバンド演説の前半部分を概観して感じるのは、何よりもその叙情性である。また、責任野党「党首」の立場から次期総選挙での政権奪回を具体的に意識した内容になっている、という印象も否定できない。それゆえ逆の見方をすれば、BBCの批評にもあるように「極めて個人的な演説」であると同時に、それなりに挑戦的で「大胆な試み^⑥」として評価することも可能であろう。

(2) 二〇一二年ミリバンド演説に見るワンネーション・レーバーの概要

ミリバンド演説における「ワンネーション国家構想」を分析してみると、総論として「ワンネーション・ブリテンおよびワンネーション・レーバーの精神と目標」が示されていることが分かる。その要旨は、以下のとおりである。即ち、イギリスの再建を目指して誰もが自分の役割を果たし、それに基づく繁栄が公平に共有されるような、わが国の common lifeを伴う空間が大切となる。そうした国づくりのためには、弱者への支援や平均的生活水準の維持、不平等の是正などが必要である。そしてそのためには、労働党が One Nation party となつて、One Nation government

を形成しなくてはならない。ワンネーション・レーバーは、オールド・レーバーへの回帰ではないし、(エドによれば) 支配層の説明責任を軽視してきたとされるニュー・レーバーとも異なる。⁽⁷⁾

ここから、新党首エドが、かつてのニュー・レーバーともオールド・レーバーとも異なる独自の党路線を目指していることが分かる。他方で、平均的ライフスタイルの維持や不平等の是正などを主張していることから分かるように、「左右」双方の伝統をそれなりに重視しているようにも見える。

さらにミリバンド演説を分析していくと、続いて、各論的位置づけとも言うべき「ワンネーション・ブリテン構築の方法論」を見ることが出来る。それによると、「持てる一部のメガバンクなど少数派」と「持たざるその他大勢の国民」の「二つの国民」に分裂した現状を打破し、これを治療する One Nation economy を確立するべく早急に改革し構築されるべきものとして、One Nation banking system (銀行改革) → One Nation skills (教育改革) → One Nation business model (企業競争対策) という二つの領域が挙げられている。そして、ワンネーション・ブリテンの構築に不可欠なのが common life の維持であり、そのために取り組んだり擁護したりすべき問題として、以下の三つが指摘されている。移民問題 (不当な移民・雇用の取り締まりを強化する)、スコットランド独立問題 (一部の住民による独立の意思は尊重するものの、連合王国を維持する)、NHS 問題 (保守党流自由市場モデルに基礎づけられたトップダウン型の NHS 再編には反対する) がそれである。⁽⁸⁾

こうして見ると、ミリバンド演説におけるワンネーション・レーバーは、改革の必要性や労働党的価値観を土台にしているという点では、何らかの意味で、様々な従来のかつ伝統的側面やその流れを受け継いだものと言える。しかしその一方で、責任野党として次期総選挙での勝利・政権奪回実現を強く意識した内容も含まれていることが分かる。

それゆえ、同演説で表明されたワンネーション・レーバーには、格差が拡大した現在のイギリスを率いるリーダー(次期首相)に相応しい自分の存在と役割を、マスメディア等を通じて党内外に広くアピールする狙いがあったと考えられる。さらにつけ加えれば、同演説を報道する新旧メディアを利用して、後述するように、自分のリーダーシップにつきまとう党内外の不安や懸念を払拭する意図があったとも推察できるのである。⁹⁾

(3) ワンネーション・レーバーの特徴

エドの知的顧問であり、イギリスの *The Political Quarterly* 誌の特集でミリバンド演説やワンネーション・レーバーについても分析したウッド (Stewart Wood) によれば、イギリスが(持てる少数派と、持たざる多数派との)分裂国家となってしまうのを回避するためにも、イギリス経済社会の根本的輪郭を変える a new settlement 達成の必要性こそ、ワンネーション・レーバーの出発点とされる。それは、少数派でなく多数派を通じて生産・繁栄・common life が基礎づけられるような国づくりを見守っていく、という考え方でもある。さらにつけ加えらると、ある重要な点において、現在は一九七〇年代末期に似ているとも考えられている。なぜなら、当時と同じく現在も、いわゆる an old settlement — かつては戦後福祉国家的解決法だったが、今では逆に自由市場を重視したサッチャー (Margaret Thatcher) 流解決法を指す¹⁰⁾が、その信頼を失っているように思えるからである。

さらにウッドは、ミリバンド演説に見られるワンネーション・レーバーの狙いについて、今イギリスが直面している受難を凌ぐうえで必要な「連帯」(solidarity) を社会に提供し、長期的な繁栄と安全をより多く提供できる「異なる経済」を構築し、生活手段まで補強する「別の倫理的側面」を重視することだと述べている。¹¹⁾ エドの知的代弁者と

も言うべきウッドの分析を解釈すると、オールド・レーバーもニュー・レーバーも超越した「新世代の」労働党を目指す試みであると同時に、成功すれば「サッチャリズム」に匹敵する可能性まで秘めた挑戦的な取り組みこそ、エドの言う「ワンネーション・ブリテン構築を目指す労働党」、即ち「ワンネーション・レーバー」ではないかと思えてくる。

こうしたウッドの分析に関してヤコブ (Michael Jacobs) は、同誌上で次のように解説している。「戦後労働党政府のつくった戦後経済秩序 (※前述の an old settlement) にサッチャーが喜んで挑戦していたことを例に挙げてウッドが描いているのは、今後一〇年間イギリスが直面する根深い経済的社会的困難に対する潜在的かつ遠大な一連の反応である。ウッドによって…暗に示され—そして例えば、グラスマン (Maurice Glasman) のような別の労働党系思想家たちの著作等で示されている、リアルな経済、従来以上に強力な中小企業、企業内取締役会の労組代表、強固な職業教育および訓練、そしてこれらを土台から支えるのに適した (例えば) 地域金融システムを持つドイツ型経済 (German-style economy) の方向にイギリスはもつと近づくべきだ、とする考え方なのである」¹²⁾。

ウッドとヤコブの解釈や説明に従うと、地域金融システム (銀行改革) などに代表されるローカリズムや地域性を重視し、若者の職業教育・訓練 (教育改革) や、企業内労組代表、中小企業強化策 (企業競争改革) なども考慮した「ドイツ型」経済の構築こそ、前述した One Nation economy のモデル (理想像) となつていことが分かる。そしてこれこそ、イギリス経済社会の根本的輪郭を根元から変えることにつながる a new settlement 達成への近道となる。また、上述のグラスマンという労働党系思想家の役割と影響がワンネーション・レーバーでは無視できない存在になつている、という事実も読み取れるのである。

(4) ワンネーション・レーバー的アプローチを支える諸原理

ここでは、ワンネーション・ブリテンの構築を目指す労働党（ワンネーション・レーバー）が実際の政策のなかで強調していると思われる諸原理について、説明していくことにしたい。

ワンネーション・レーバー（政府与党）として実践すべきアプローチの中核的理念（core ideas）を、ウッドは五つ指摘している。

- ① ドイツをモデルとした強い経済づくりに関与すること
- ② 不平等を是正しようと決意すること
- ③ 一部の人びとだけでなく、全ての人びとの「責任」を重視すること
- ④ わが国の common life の諸要素を擁護すること
- ⑤ ポスト一九七九年的解決の倫理に挑戦すること¹³⁾

①には、上述したように、若者に対する職業教育訓練の充実化や銀行改革などが含まれ、文字どおり One Nation economy の構築と関係がある。②は、低所得者救済用基金、例えば「豪邸税」導入への関与などが挙げられる。また、④は元来保守党の思想に近いとされることも多かったが、多様性に対する寛容という意味でもある。そして⑤は、ワンネーション・レーバーも「個人の自由」は認めるが、それは「個人主義万能」というものではないというニュアンスが含まれている。

これらを別の側面から言い換えてみると、およそ次のような考え方も含まれる。①に関しては、「左派からのサプライサイド革命」と呼ぶべきものが必要だとする主張と関係が深い。なぜなら、サッチャー流自由市場原理主義こそ、イギリスを今の「二つの国民」に分裂させた元凶とされるからである。ウッドによれば、左派からのサプライサイド革命の内容には、固有の技術教育訓練や徒弟制度を構築するため雇用主と協力していくこと、投機による利益ではなく刷新用資金提供に基づく銀行競争力の強化などを通じて銀行改革を促進することや、主要産業の育成に伴うスキル能力ならびに賃金の向上、そしてグローバル経済の下では従来と異なる競争アプローチも必要だとする認識、などが含まれる。

②は、所得の再分配や市場に関する諸規定を改革することによって、可能な限り平等な経済を実現していく試みのことでもある。ウッドによると、再分配は進歩派政府の重要兵器であり続けるからである。③でいう「責任」(responsibility)は、イギリス社会保障システムの核心部分であると同時に、年齢・民族・収入・地域の違いを超越して人びとを共に結びつける倫理となる。それゆえ、ワンネーション・レーバーとしては、全ての人びとに対する、全ての人びとによる、互恵主義 (reciprocity) や相互義務に期待することになる。

これらの諸原理は、前述したグラスマンらが最近主張している「Blue Labour」という考え方(後述)にも通じるものがあると考えられる。いずれにせよ、これらを見る限り、新たな制度改革を伴うのは必至となるため、やはり労働党にとって大胆かつ挑戦的アプローチとなることは避けられないであろう。¹⁴⁾

(5) ワンネーション・レーバーの捉え方と問題点

ワンネーション・レーバーのアプローチを支える上記五大原理を指摘したウッドは、結論として次のように述べている。「…a new settlementは、そして特に『中流層からの支出』増に基礎づけられる経済というのは、支出をますます増やすことによつて達成されるのではなく、支出のルールを書き換えることによつて達成されるのである。…それはイギリス労働党の従来的方法というよりは、西欧大陸諸国の社会民主主義政党の方法に近い内容である¹⁵⁾。ここで注目されるのは、ワンネーション・レーバーのアプローチが、「イギリス的」というよりは「ヨーロッパ大陸的」なものに近いのではないかという指摘である。これは、グローバルで自由な「市場」に委ねるイギリス型「自由主義政治経済学」の伝統というより、強力で地域にも根ざしたドイツ型経済モデルを理想としているからであろう。それとも、例えば構造改革などにおいて「富の再分配」より「パイの大きさを広げる」のを好むフランス社会党の伝統に近いということなのであろうか。

また、ギャンブル (Andrew Gamble) によるイギリス政治経済研究では、「市場」を重視するイギリス伝統の「自由主義政治経済学」(liberal political economy) と、それに対立する、例えば二〇世紀初頭のイギリス保守党を論争と混乱に陥れた「関税改革」(tariff reform) 派の主張などに代表される「国民政治経済学」(national political economy) の流れも指摘されている¹⁶⁾。地域や地方を重視する一方、「国民」の観点から政治経済の再構築を志向するという意味で、ワンネーション・レーバーは、国民政治経済学の流れを受け継ぐ存在・内容として位置づけられるのであろうか。いずれにしても、この点の詳細な分析については今後の研究課題としたい。

ワンネーション・ブリテンを標榜する限り、そこには環境問題からスコットランド独立問題に至るまで、ありとあ

らゆるテーマが含まれる。そのため、単なる「スローガン」化してしまい、その反動でイデオロギー的明快さは逆に弱まるのではないかという問題点も常に指摘される⁽¹⁷⁾。その意味で、ワンネーション・レーバーのアプローチにつきまとう不確実性や実現可能性への疑問はもちろん、後述するように、一つ間違えば労働党内でも多方面から攻撃・批判されやすい考え方になり得るといえることができるであろう。

以上のように、ワンネーション・レーバーの内容と特徴に関しては、様々な捉え方や解釈が可能となる。それでも、その内容と特徴について、あえて簡単に要約するならば、政権奪回を視野に入れてエド「党首」本人の口から党内外に直接アピールされた、個人的かつ叙情的な narrative 風の内容だという点を、先ず指摘しなければならない。また、自分自身のリーダーシップはもちろん、国内の融和と連帯の必要性も強調されている。そして何より、イギリス労働党の様々な伝統は受け継ぎながらも、ドイツなどを参考に、主として「地方（地域）」や「国民」という視点からイギリス政治経済社会の輪郭を再構築しようとする、大胆かつ挑戦的内容のプログラムないしアプローチとして捉えることが可能なのである。

Ⅲ．ワンネーション・レーバーの背景

(1) 二〇一〇年労働党党首選挙結果との関連

ここからは、ワンネーション・レーバーの本質をさらに掘り下げて考察するため、その登場の背景について検討していく。

既述のとおり、二〇一〇年総選挙結果は、イギリス労働党にとって戦後ワースト二位となる低い投票率（敗北）に

表1 2010年イギリス労働党党首選挙結果の概略 得票率（％）

選挙人団（1/3 1/3 1/3）	1回目	2回目	3回目	4回目
E. ミリバンド	34.3	37.5	41.3	50.7（当選）
D. ミリバンド	37.8	38.9	42.7	49.4
E. ボール	11.8	13.2	16.0	
A. バーナム	8.7	10.4		
D. アボット	7.4			

出典 Thomas Quinn, *Electing and Ejecting Party Leaders in Britain*, 2012, p. 71の表3-3より。

終わった（詳細については、註（1）を参照）。それゆえ、ワンネーション・レーバーが新党首エドの労働党再建プログラムの一つであることは、ほぼ間違いない。したがってワンネーション・レーバーの本質を理解するためには、二〇一〇年総選挙敗北後（九月）に行われた労働党党首選挙に注目し、「ポスト」ニュー・レーバー（ブレア、ブラウン）の新党首にエドが選出された背景についても理解する必要がある。

表1を見ると、二〇一〇年労働党党首選挙¹⁹は、実質上、兄デーヴィッドと弟エドとの「ミリバンド兄弟対決」だったことが分かる。同時にその対決は、ほぼ党内ブレア派（デーヴィッド陣営）対ブラウン派（エド陣営）の代理戦争という構図で理解されることも多い。そして結果的にはエドがデーヴィッドを四回目の最終決戦で逆転し、僅差で勝利を収めた。

表1を通じて、二〇一〇年労働党党首選挙結果（エド選出）には「デーヴィッド選出阻止」という側面があったこと、いわゆるニュー・レーバーが必ずしも党内を席卷していた訳ではなかったこと、そして「エド」と「デーヴィッド」に象徴される党内二大勢力を中心とした「党内分裂」の可能性をもたらしたこと、などを読み取ることができる。では、エドやデーヴィッドは、これまで党内からどのように見られており、党内のいかなる人びとから支持されていたのであろうか。

表2 党首選候補者の資質に関する労働党員および組合員の見解（2010年9月）
（%）

	労働党員 [デーヴィッド エド]		労働党関係組合員 [デーヴィッド エド]	
野党党首として相応しい	44	21	31	23
一番感じが良い	25	27	21	22
同じ見解の持ち主	24	29	16	24
身近な存在	16	16	12	15
次期総選挙に勝てる	55	25	42	24
首相として最適	45	28	33	28

出典 T. Quinn, *op. cit.*, p. 73の表3 - 4に基づき筆者作成。

表2を見ると、エドが党員からも組合員からも「自分と同じ見解で親近感を抱きやすい人物」と認識されていたのに対し、敗れたデーヴィッドはそのリーダーシップや政権奪回の可能性という点で評価されていたことが分かる。特に「野党党首として相応しい」「次期総選挙に勝てる」そして「首相として最適」という項目では、党員の意見でも組合員の意見でも、比較的大差でデーヴィッドに軍配が上がっていると言える。つまり、労働党内から見た場合、野党期に生じがちな党内分裂を回避するという点と、党内融和を実現することが可能な党首候補か否かという点で、前述のとおり、エドには兄以上に不安や懸念がつきまといっていた可能性が高い。それゆえ、新党首となった直後のエドからすれば、ほぼ二つに割れた党内の融和と連帯を実現（特にデーヴィッド支持派と和解）することが最大の急務だったと推察される。

また、表3を見ると、影響力の強い（部門内シェアの八割以上を占める）五大労組から支持されていたのは、デーヴィッドではなくエドだったことが分かる。ここから、党内融和・連帯と政権奪回を目指す新党首エドとしては、「労組に支配された党首」、*a creature of*

表3 2010年労働党党首選挙最終決戦における(部門内シェア上位五大労組)

労働組合	(部門内シェア)	組合員投票の支持率 (%)		
		組合としての推薦者	デーヴィッド	エド
Unite	(45.1)	エド	34.0	66.0
GMB	(17.4)	エド	36.4	63.6
UNISON	(11.2)	エド	40.9	59.1
CWU	(7.4)	ポール	48.3	51.7
USDAW	(6.1)	デーヴィッド	73.6	26.5

出典 T. Quinn, *op. cit.*, p. 80の表3-7に基づき筆者作成。

the union barons」というイメージや評価を払拭する必要性もあつたのではないかと考えられるのである。

ワンネーション・レーバーの内容や特徴を、エドが新党首に選ばれた理由・背景(党内事情)から考察してみると、自分の指導力を党内外にアピールし、デーヴィッド支持が多いとされるいわゆる党内「ブレア派」との和解で党内融和・連帯を実現し、そして他の候補者以上に主要労組とその幹部たちから支持されたため「労働貴族の創造物」というマイナス・イメージを払拭する、という狙いがあつたと考えられる。したがって、主要労組や左派系議員などのおかげで兄との競争を制した(表1を参照)エドには、「ワン」ネーション・ブリテン構築のためにも、リーダーシップの強化と同時に党内団結を図り、「ワン」レーバーパーティを構築する必要があつたのではないかと思われるのである。

(2) 党内モダナイザーとの関連

党首選挙結果とワンネーション・レーバーとの関連性とは別に、エドのワンネーション・レーバーを「党内モダナイザー」²⁰路線の延長線上に位置づける見方もある。前述の *The Political Quarterly* 誌の特集でウィッカムジョーンズ (Mark Wickham-Jones) は、ワンネーション・レーバーの位置づけについて次のように述

べている。エドの主張には曖昧さが多く見られる。しかも、それは決して目新しい内容という訳でもない。むしろ党内論争というより、キノック (Neil Kimock) やブレアに代表される党内モダナイザー路線の融合・延長線上に求めべきである。⁽²¹⁾

ウィツカムジョーンズによれば、エドの二〇一一年党大会演説 (責任ある資本主義などについて言及) なども、過去の党文書の「焼き直し」であった。そしてキノックも、「ドイツ流」に基づいたイギリス資本主義再建に関心があつたとされている。さらにブレアの場合は、こうしたキノック流アプローチを何らかの「社会的包摂」用ラベルとして理解した。例えば、部分的には選挙目的の内容だつたためエドとの直接的繋がりには確認できないものの、ブレアが野党党首時代に行った一九九五年 (一〇月) 党大会演説において、この路線が既に表明されたこともあるとしている。⁽²²⁾

こうしてウィツカムジョーンズは、エドのワンネーション・レーバーを、「イデオロギー上の立場」と「選挙上の立場」とを結びつける存在として理解する。同時に、それに関するエドのイニシアチブは、ブレアとキノック二人のアプローチ、即ち「社会的包摂という言説」を伴う「党政策見直しの詳細」を、一つに結びつけようとする試みとして解釈されている。そして、こうした分析結果を踏まえたうえで、エドのワンネーション・レーバーについては、過去の諸提案から何かを引き出して学んだり、その強さを土台として何かを打ち立てたりすることができる「労働党の能力」を暗示するものとして評価している。さらには、当時のキノック党首やブレア党首の事例から見て、労働党「党首」エドに対するその政策顧問の個人的関与も意外に大きかったのではないかと見るのである。⁽²³⁾

エドのワンネーション・レーバーが、以上のような「労働党モダニゼーション」の流れと繋がりを持つとすれば、それは、エドにとって兄であり、党首選挙では一時的にせよ自分の「政敵」となったデーヴィッドの存在と影響力を

かなり意識したものであると言える。具体的には、前述した党内融和や、労組色からの脱却に加え、政権奪回という目標を強く感じさせるレトリックとして欠かせない役割があったということでもある。イデオロギー的に曖昧さが残る点も否めないが、ワンネーション・レーバーは、エド「党首」個人にとって必要不可欠であると同時に、兄デーヴィッド（や、その他党内批判勢力）との和解・協力、ひいては党内融和・連帯においても欠かせない意味を持っていると考えられる。

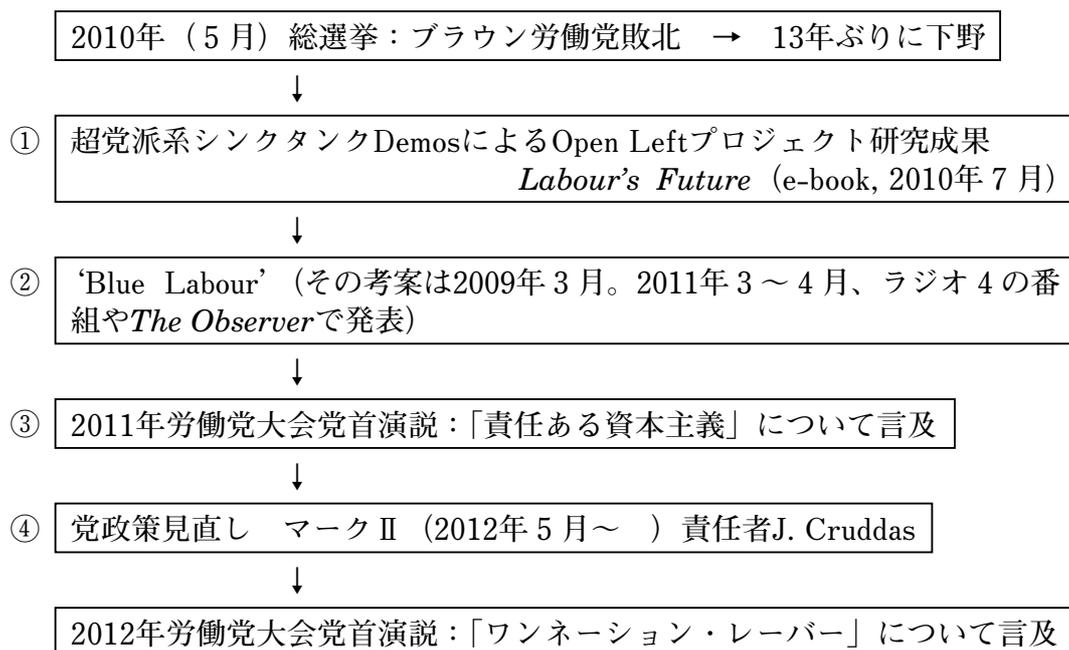
そこで、ブレア以来の「党内モダナイザー」的役割をも受け継ぎ、ミリバンド兄弟対決に象徴される党内対立も克服可能で、なおかつ、兄弟間に大きくアーチをかけるきっかけとなり得た「基本理念」についても検討する必要があるのである。

(3) 労働党政策見直しプロセスとの関連

では、既述のように、労働党内に思想面で大きなアーチをかけることが可能であると同時に、ワンネーション・レーバーにも比較的大きな影響をもたらしたと思われるその「基本理念」とは、一体何であろうか。それを明らかにする手がかりは、野党党首のエドに思想面・政策面で提言してきた人物たちに求めることができる。

ワンネーション・レーバーという考え方に比較的大きな影響力を及ぼしたとされる人物として、前述の *The Political Quarterly* 誌の特集に寄稿したウッドの他に、研究者で、ロンドンを中心に活躍する慈善活動家でもある労働党上院議員グラスマン、そしてグラスマンの「ソウルメイト」で、エドによって二〇一二年五月頃から労働党「政策見直し」(policy review) 責任者に任命された労働党下院議員クルダス (Jon Cruddas) などが挙げられる。ここで注

図1 労働党政策見直しの概略と「ワンネーション・レーバー」に至る流れ



出典 J. Gaffney and A. Lahel, “The Morphology of the Labour Party’s One Nation Narrative: Story, Plot and Authorship”, *The Political Quarterly*, 84-3, 2013, p. 331の図1などを参考に筆者作成。

目されるのは、グラスマンもクルダスも、前述のブルー・レーバーという考え方に関係が深いという事実である。

そこで今度は、このブルー・レーバーという考え方や、ワンネーション・レーバーとの関連について検討していく。しかしその前に、二〇一〇年総選挙敗北以降（エド新党首選出以前）労働党内で進展していた党政策見直しプロセスの概略を明らかにする。そうしたうえで、その流れから見た「ブルー・レーバー」と「ワンネーション・レーバー」との関係などについて考察してみることにはしたい。

図1からも分かるように、労働党の政策見直しプロセスは、二〇一〇年総選挙敗北直後から、というより、エド新党首選出以前から開始されている。先ず、ブラウン政権下で大臣を務めたこともあるパーネル (James Purnell) を中心に、Demosという超党派系シンクタンクで、Open Leftという三年プロジェクトがスタートした

(図1の①を参照)。労働党の今後のあり方について研究会を開催し、その成果は二〇一〇年七月に *Labour's Future* (e-book) として発表されている。ギャフニー (John Gaffney) によると、その基本理念は、ローカリズム、互惠主義、個人と国家の関係、国家と市場の改革などとなっている。これは、地方分権の政治を重視した内容であり、ブレア以前というよりアトリー以前の労働党に戻って出直すことすら提案されているという。そしてその内容は、ニュー・レーバーにとつても、二〇一〇年敗北後の政策見直しにとつても、全体的プレリウドとしての役割を持つと同時に、レトリック上のアイデアに匹敵する存在になったとされる²⁴のである。

そうした流れを受け継いだ「ポスト」二〇一〇年型 narrative は、党内に幾つか存在するかもしれない。しかし、とりわけワンネーション・レーバーの生成に大きな役割を与えたのは、図1②のブルー・レーバーという考え方だと思われる。なぜなら、前述のグラスマンらによって示された、ブルー・レーバーと称される社会理論は、*Labour's Future* の路線を受け継いでおり、労働党の起源と本質的目標に立ち戻ること、より具体的には、互惠的かつ相互扶助 (mutualism) 的でローカルなコミュニティに基礎づけられた社会 (民主) 主義に立ち戻ること、などを主張しているからである。

ブルー・レーバーの内容と特徴についてギャフニーは、二〇世紀初頭のイングランドをイメージしやすい「コミュニティ、信仰、家族、互惠主義、相互扶助・協力、内部団結、愛国心などを基本的レトリックとした、現代の多文化主義的コミュニティアニズム」と位置づけている。そしてその延長線上には、例えばメガバンクの略奪的な社会経済権力を回避することや、「移民野放し」状態に対する反発などがあり、さらには理想郷的イングランドへの回帰と²⁵いったノスタルジックな側面や、いわば「社会保守」的側面も一部伴うと見ている。

こうした点から、グラスマンのブルー・レーバーという考え方には、オールド・レーバー批判はもちろん、何らかの意味でニュー・レーバー批判さえ伴うと言える。二〇一一年党大会で「責任ある資本主義」についてエドが言及した(図1の③)点も、ブレア時代の銀行やマスコミがその説明責任を十分果たしてこなかったことを二〇一二年党大会演説で批判的に訴えた事実と関係がありそうだからである。

そして図1の④で、二〇一〇年総選挙敗北以降の労働党内に「大きくアーチをかけるようなストーリーが無かったこと」を前述のクルダスが指摘した結果、党の政策面や組織面だけでなく、思想面や narrative の検討も重視されるようになった。換言すれば、思想的にグラスマンに近いクルダスによって、グラスマン流ブルー・レーバー路線への言及が目立つようになったとも指摘されているのである。因みに、一時的にせよクルダスは「ブレア派」と見られていたこともあったため、エドのクルダス抜擢人事は「サプライズ」でもあった⁽²⁶⁾。

こうして、大雑把ではあるが「パーネル」↓「グラスマン」↓「クルダス」という流れを経て、二〇一二年労働党大会演説におけるエドの「ワンネーション・レーバー」言及に至ったと見ることができるのである。

(4) 「ブルー・レーバー」と「ワンネーション・レーバー」

そこで最後に、前述したブルー・レーバーとワンネーション・レーバーとの関係について考察することにした。そのためには、グラスマンやクルダスと「党首」エドとの関係について説明が必要だと思われるが、その前に、思想面から見た両者の基本的共通点・相違点について若干検討してみたい。

例えばイギリスの社会理論家ミルバンク (John Milbank) は、エドの二〇一二年党大会演説によってブルー・レー

バーがワンネーション・レーバーとして生まれ変わったと評価しており、イギリス近現代史家のローレンス（John Lawrence）によっても、ブルー・レーバーの核となる立場は、ワンネーション・レーバーに肉付けする役割を果たしたとされている。⁽²⁷⁾これらの指摘から見ても両者には内容面で繋がりがあり、どちらかと言うとブルー・レーバーという考え方がエド「党首」に影響を与え、彼のイニシアチブやオリジナリティなどを加えることによつて、ワンネーション・レーバーに発展していったと推察される。

両者の共通点としては、既述のように、例えば「地域性」あるいはコミュニティの重視や、人びとの相互扶助・互恵主義への期待、団結・連帯の強調といった点などを指摘することができる。では、両者の相違点は、どのような部分に求められるのであろうか。

前述したミルバンクの所論⁽²⁸⁾を踏まえて考察してみると、ブルー・レーバーが、例えば家族や信仰、愛国心、移民野放し状態や大企業専横状態などへの反発、そしてイングラント的伝統など（今日風にリニューアルされた）「社会保守」的側面を比較的重視するのに対し、エドのワンネーション・レーバーでは、そうした側面よりもむしろ「経済的平等」「格差の是正」といった目標の追求にウェイトが置かれているように思われる。

また、ローレンスによつてなされた詳細な分析に従うと、両者の共通点は、現在の「キャメロン（David Cameron）保守党」クレッジ（Nick Clegg）自民党連立政権の政治」と「ニュー・レーバーの政治」両方のオルターナティブとなり得るヴィジョン、換言すれば「教条的ネオ・リベラリズム」も「ステイティズム」も拒絶する「ラディカルでコミュニケーション的なプロジェクト」という点に求められる。しかしながら両者の相違点に関して、次のように指摘されている点も興味深い。即ち、（一九四五年総選挙での労働党大勝利はむしろ長期的衰退の始まりだったと見るため）設立時

の精神を忘れ、ステイティズムと政権意欲に毒された「ポスト」一九四五年の労働党ではなく、元来労働者たちの互助組織として出発した設立当初の同党の伝統に立ち戻ることを強調するのがブルー・レーバーの立場だ、という指摘がそれである。これに対しワンネーション・レーバーは、逆に一九四五年の意義の再評価（名誉回復）を狙ったものだとされている。なぜなら、ワンネーション・レーバーというのは、社会正義に關与する包括的国民党として労働党が具体化されたのを一九四五年と見る立場だからである。また、リベラリズムの役割・位置づけに關する両者の相違についても興味深い指摘がなされているが、紙幅の關係でそれについての詳述は省略したい。

これらの他にも、ブルー・レーバーが「伝統的イングラント」回帰を主張しているように見えるのに対し、ワンネーション・レーバーは「ドイツなど大陸型モデル」を志向する立場として理解することも可能かもしれない。いずれにせよ、両者の間には關連性や繋がりと同時に、明確な相違点もあることが分かる。

さて、エドとその關係者たちから聞き取り調査を行ってきたハザン (Mehdi Hasan) によると、総選挙を直前に控えた二〇一〇年二月、エドとグラスマンは何度か打ち合わせを行っている。後にブルー・レーバーというブランドの中核となる「相互扶助論」と「コミュニティに基礎づけられたアクティヴィズム」とを關連づけた最低生活賃金キャンペーンを、彼が自分の選挙運動に採り入れたがっていたからであった。グラスマンとクルダスの繋がりに關しては既述のとおりである。また、親友たちから「平等論者」と評価される一方、右派系メディアや党内ブレア派からは「Red Ed」というレッテルが貼られていたエド自身、「不平等」問題を最重要視する。同時に、労働党内多元主義者として、キノック流モダニゼーションをはじめ、党内の多様な進歩的思想や伝統を統合できる自分の能力とその意義を強調することにも熱心だったという。そしてハザンは、「エドは自分のリーダーシップやヴィジョン、政治スタイル

に関する党内コンセンサスを打ち立てようと意識的に試みている³⁰⁾と評価している。

このような経緯から判断すると、二〇一〇年から二〇一二年にかけて、前述のとおりエドがクルダスを個人的に抜擢したことで、グラスマンのブルー・レーバー路線が「ワンネーション」という形となり、エドの個人的かつ叙情的 narrative に盛り込まれるようになったと考えられる。その意味で二〇一二年という年は、エドの労働党にとって、確かに一つの「ターニングポイント」³¹⁾だったと言えるであろう。もつとも、ハザンらの指摘によると、エドは「自分の政治哲学とか自分のリーダーシップを正当化する理論として、ブルー・レーバーを盲目的ないし無条件に奉ずるつもりはない³²⁾」。したがって、ブルー・レーバーなどをベースとして、そこにエドの個人的叙情的 narrative を加え味つけた内容こそ、さしあたり「ワンネーション・ブリテンの構築を目指す労働党」、即ち「ワンネーション・レーバー」ということになるのではないだろうか。その意味で、ワンネーション・レーバーの形成には、党首エドの自主的なイニシアチブや個人的パフォーマンスが比較的大きな役割を果たしていると思われることもできる。

それに加え、ブルー・レーバーという考え方そのもの（既述のように、保守的な側面も伴うその内容）は、議論の段階で労働党内に様々な波紋や批判を巻き起こした。しかし同時に、エドの労働党に対し何らかのインパクトをもたらしたのもブルー・レーバーだったことは間違いない。例えば、労働党の地方議員、慈善活動家で、ガーディアン紙などにも寄稿するジャーナリストのデーヴィス (Rowenna Davis) は、ブルー・レーバーのアジェンダからインスピレーションを受けたというエドの証言を紹介して、二〇一一年に次のように述べている。

「ブルー・レーバーという考え方は、党首選挙によって敵・味方に分かれたミリバンド兄弟二人を引き合わせ、仲直りさせるものであった。エドがブラウン派、兄はブレア派というレッテルを貼られていたにもかかわらず、グラス

マンが二人に初めて示したコミュニティ組織化用アジェンダのおかげで、現在二人は一つに纏まっている。その提案はブルー・レーバーというブランドではなかったかもしれないが、その精神はブルー・レーバーだったからである³³。この点に注目してみても、ブルー・レーバーとワンネーション・レーバーとの繋がりを再確認することができよう。

以上の点から、ワンネーション・レーバーの背景は、二〇一〇年労働党党首選挙結果、エド新党首を取り巻く党内環境、党政策の見直し、そして党内モダナイザー路線をはじめ、とりわけブルー・レーバーに代表される労働党の多様な伝統や諸要素に求められると言えるのである。

IV. おわりに

「ワンネーション・ブリテン」の構築を目指すイギリス労働党の新しい基本路線、「ワンネーション・レーバー」の特徴として、以下の点を指摘することができる。即ち、現段階（野党期）では党内の様々な伝統的諸要素を受け継ぎながらも、同時に、とりわけ「オールド・レーバー」と「ニュー・レーバー」の止揚ならびにエド個人のイニシアチブを通じて、党内融和と連帯の実現、労組支配色や党内リーダーシップへの懸念の払拭、党首への求心力強化、そして次期総選挙を通じて政権を奪回しようとする「エド党首主体の試み」という点がそれである。したがって、党首としてエドが現在取り組んでいる党内改革やその動向も、ワンネーション・レーバーと切り離して理解すべきではない。

そうした意味で、ワンネーション・レーバーの本質は、エド党首を誕生させた二〇一〇年党首選挙を通じて生じる可能性もあつた党内分裂（の危機）を回避しようとした点に求められる。換言すれば、エドが描いた「ワンネーション

ン・ブリテン」構築のためにも、彼は野党党首として何よりも先ず、「ワン」レーバーパーティ（二つに纏まった労働党）構築の方針を党内外にアピールする必要があったと考えられるのである。もしかしたら、戦後最低の得票率を記録した一九八三年総選挙―註(1)を参照―後、労働党を脱党した少数の「党内右派」議員によって「社会民主党」(the Social Democrats) が結成された当時の経験も、教訓として作用したのかもしれない。

ワンネーション・レーバーの思想的中核をなす諸要素のなかでも、とりわけ関連が大きいのはブルー・レーバーという考え方であった。地域や相互扶助などを強調する点では、「ポスト」ニュー・レーバーの思想的立脚点としてそれなりに有効だったと思われる。しかし、既述のようにブルー・レーバーの内容には、労働党から見れば「社会保守」的側面も多かった。エドがブルー・レーバーの路線をそのまま採用していたら、逆に党内分裂の可能性が高まる恐れもあったと考えられる。そこで、既述のように、ブルー・レーバーの立場を部分的に取り入れながらも、「不平等や格差の是正」「社会の融和・連帯」にウェイトをかけて「労働党らしさ」を強調しつつ、次期総選挙での政権奪回も視野に入れて、全国民向けに（本質的には労働党内向けに）エドが主体的に発したスローガンこそ、ワンネーション・レーバーだったと言える。

それゆえ、ワンネーション・レーバーは、単に「保守党の考え方を盗んだ」だけの作品ではない。むしろ、潜在的政権政党としての責務を十分果たそうとする野党・労働党の基本姿勢もここから伺えるのである。その意味でワンネーション・レーバーは、まだ抽象的で曖昧な点も多いとはいえ、「ポスト」ニュー・レーバーのみならず、「ポスト」キャメロンⅡクレグ連立政治のオルターナティブとしての資格を、十分備えていると言えよう。

(1) 二〇一〇年総選挙における労働党の得票率は二九・〇% (保守党三六・一%、自民党二三・〇%) であった。因みに、労働党の得票率が戦後最低だったのは、同党の政策面での「左傾化」が著しかったとされる一九八三年総選挙時の二七・六% (保守党四二・四%、自由党二五・四%) である。

(2) 定数を前回と同じ六五〇議席 (過半数三二六議席) とした場合の、各種世論調査結果に基づく次期総選挙主要政党予想獲得議席数 (二〇一四年三月) として、以下のような獲得議席予測結果も公表されている。

保守党二五六、労働党三四七、自民党二一、その他二六 <<http://ukpollingreport.co.uk/ukpr-projection-2>>

(3) ワンネーション保守主義とは、広義のイギリス保守主義を構成する一つの潮流であり、イギリス保守党のあり方を「国民党」として認識させたディズレーリの言説に由来する。具体的には、「一つの国民」政党として保守党が全ての階級と全ての地域に広くアピールする必要性を強調するものであった。それゆえ、階級を軸とした分裂や抗争を最小限に食い止めるため、福祉国家の受容や進歩的社会立法の導入にそれなりに関与することにも繋がっていく。こうした姿勢は、主として一九五〇年代の保守党政権によって実践され、結果として、労働党との戦後「コンセンサス・ポリティクス」を支える一要因になったと考えられる。

しかしながら、ニューライト (New Right) 的思考の抬頭などにより、特に一九八〇年代以降の保守党では、こうしたワンネーション保守主義派の影響力は相対的に弱まっていた。

Cf. Duncan Watts, *A Glossary of UK Government and Politics* (Edinburgh: Edinburgh University Press) 2007, p. 179.

(4) 本稿では、イギリス政治学会 (Political Studies Association, PSA) とその支援を受けた *The Political Quarterly*, 84-3, 2013による分析特集 'Reflections on One Nation Party' に寄せられた以下の四本の論文を、研究上の主な手がかりとしている。

- ① Michael Jacobs, "Introduction: Reflections on One Nation Labour"
- ② Stewart Wood, "Explaining One Nation Labour"
- ③ Mark Wickham-Jones, "The Modernising Antecedents and Historical Origins of One Nation Labour"
- ④ John Gaffney and Amarjit Label, "The Morphology of the Labour Party's One Nation Narrative: Story, Plot and

Authorship”

- (5) <<http://www.labour.org.uk/ed-miliband-speech-conf-2012>> を参照されたい。
- (6) 主にBBC政治ジャーナリストのロビンソン (Nick Robinson) によるコメント。
このシリバンド演説に対して各党は、当然のように辛辣な批評を加えている。保守党: 「労働党は与党時代の過ちから何も学んでいない」¹⁾ 自民党: 「与党時代の記録をニアブラシで修正しようとしている」²⁾ スコットランド民族党: 「労働党はワンネーション・ナリー主義と何ら変わらな」³⁾。<<http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-19792070>>
- (7) <<http://www.labour.org.uk/ed-miliband-speech-conf-2012>>
- (8) <<http://www.labour.org.uk/ed-miliband-speech-conf-2012>>
- (9) M. Jacobs, “Introduction: Reflections on One Nation Labour”, *The Political Quarterly*, 84-3, 2013, p. 315.
- (10) S. Wood, “Explaining One Nation Labour”, *op. cit.*, p. 317.
- (11) *Ibid.*, p. 317.
- (12) M. Jacobs, *op. cit.*, p. 315.
- (13) S. Wood, *op. cit.*, pp. 317-320.
- (14) *Ibid.*, p. 320.
- (15) *Ibid.*, p. 320.
- (16) Andrew Gamble, *Britain in Decline Economic Policy, Political Strategy and the British State*, fourth edition (Basingstoke: Macmillan) 1994 (都築忠七、小笠原欣幸訳『イギリス衰退一〇〇年史』みすず書房、一九八八年) を参照のしよう。
- また、イギリス保守党における関税改革論争の詳細とその意義については、拙著『イギリス政治の変容と現在』晃洋書房、二〇一四年の第六章などを参照。
- (17) M. Jacobs, *op. cit.*, p. 315.

- (18) Cf. J. Gaffney and Amarjit Label, “The Morphology of the Labour Party’s One Nation Narrative: Story, Plot and Authorship”, *op. cit.*, pp. 330-340.
- (19) 二〇一〇年イギリス労働党党首選挙は、党内三分の一ずつ区分された（院内労働党部門・選挙区労働党部門・労働党関連諸団体部門）選挙人団方式に基づく「選択投票制」（alternative vote system）で行われた。同党党首選挙結果の詳細については、拙著の第三章などを参照されたい。
- (20) 周知のように「モダニゼーション」（modernization）は、様々な意味で用いられる概念だが、ここでは「政治環境の変化に適應する目的で政党としての目標およびそれを実現する手段を再度プログラミングすること」という意味で用いている。
- (21) Cf. M. Wickham-Jones, “The Modernising Antecedents and Historical Origins of One Nation Labour”, *op. cit.*, pp. 321-328.
- (22) *Ibid.*, pp. 321-328.
- ブレアの一九九五年党大会演説の全文については、<http://www.britishpoliticalspeech.org/speech-archive.htm?speech=201>などを参照。このブレア演説の起草者は、当時からスピンドクターとして知られたキャンベル（Alistair Campbell）やデーヴィッド・ミリバンドたちであったとされる。なおキャンベルはこの一九九五年党大会でのブレア演説について、自身の日記で次のように記している。
- 「…我々は固有の戦略をつくり出さねばならない、とプレスコット（John Prescott）は言った。これを聞いた私は、基本的にやっぱり彼もわが党の一員なんだと感じた。後日プレスコットはブレアと一緒にその固有の戦略について議論したが、さしあたって彼（プレスコット）は、今何をなすべきか比較的良好に分かっていたので、我々は a line about One Nation Labour building a One Nation Britain を展開していったのである」（一九九五年一〇月五日木曜日）。
- 「…プレスコットも我々の仲間だよ、と私はブレアに言った。彼の演説では『ワンネーション・レーバー』という文言が使われたが、それは熟慮に熟慮を重ねた末の結果であり、党大会終了後も、我々としてはそれを強調するつもりでいたのである。The One Nation という路線は、プレスコットもそれを口にしたことで、これまで以上に好意的に受けとめられるようになった」

た」(一九九五年一〇月六日金曜日)。

Alistair Campbell and Bill Hagertry (eds.), *The Alistair Campbell Diaries, Volume 1 prelude to power 1994-1997* (London: Arrow Books) 2011, pp. 294-295.

- (23) M. Wickham-Jones, *op. cit.*, pp. 321-328.
- (24) J. Gaffney and A. Label, *op. cit.*, pp. 330-331.
- (25) *Ibid.*, p. 332.
- (26) *Ibid.*, pp. 334-335.
- (27) <http://theologyphilosophycentre.co.uk/papers/Milbank_BlueLabourOneNationLabourAndPostliberalism.pdf>
- (28) <http://theologyphilosophycentre.co.uk/papers/Milbank_BlueLabourOneNationLabourAndPostliberalism.pdf>
- (29) <<http://www.renewal.org.uk/articles/blue-labour-one-nation-labour-and-the-lessons-of-history>>
- (30) この点に関する分析・評価については、Mehdi Hasan and James Macintyre, *ED the Milibands and the Making of a Labour Leader* (London: Bieback Publishing) 2012, p. 165, pp. 283-288 and p. 349を参照のこと。
- (31) J. Gaffney and A. Label, *op. cit.*, p. 337.
- (32) Cf. M. Hasan and J. Macintyre, *op. cit.*, pp. 285-286.
- (33) Rowenna Davis (foreword by Steve Richards), *Tangled up in Blue Blue Labour and the Struggle for Labour's Soul* (London: Ruskin Publishing), 2011, p. 214.
- (34) 二〇一三年の夏以降党内改革のあり方を検討してきたエド・ミリバンド党首は、「党と労働組合との関係」を大刷新する改革案を二〇一四年の特別党大会で正式に発表しており、イギリス労働党ホームページによると、その改革提案の骨子は以下のようになっている。
・党費納入に関する選択権を、初めて労働組合員に与える。

- ・党務に積極的に関わりたい支持者に対しては、それ相応のきちんとした発言権を与える。
- ・一党員一票の原則に基づいて、党内での直接的関与を希望する全ての人びとに党首選挙権を与える。
- ・ロンドン市長選挙に関する労働党候補者の選定に関しては、予備選挙を通じて政治に携わるチャンスを提供し、ロンドン市民に与える。

・労働党の議員候補者選定プロセスが万人に公平に開かれ、また小細工が生じないようにすることを、地域社会の人びとに保証する。〈<http://www.labour.org.uk/big-changes>〉

上記の「党費納入に関する選択権を、初めて労働組合員に与える」等に関しては、多少解説が必要かもしれない。従来、労働党では、労働組合員は所属する労組のリーダー・幹部を通じて、本人の意思と関係なく一括してほとんど自動的に労働党へ入党（党費納入）させられていた。そのため、この改革が正式に実現すれば、今後このような慣習は理論上なくなることになる。

ただ、BBCによれば、現在、三〇〇万人の労働組合員が労働党に入党しており、労働党は入党関連費用として、そこから約八〇〇万ポンドの収入を得ているとされる。それゆえ、この改革が実現すれば、党財政面などにおいて混乱が生じる可能性もあるのではないかと予想されている。いずれにせよ、今後、個々の労働組合員たちは、労働党にこれ以上党費を納める意思があるのかどうか、発言権を持つ労働党支持者として活躍したいのかどうか、などが問われることになる。そして、これら一連の党内改革提案もまた、エド党首主体による労組支配的イメージ払拭を狙ったものであると言えるであろう。

なお、BBCによると、この改革提案がなされた直接のきっかけは、スコットランドの Falkirk 選挙区で起きた、労働党議員候補者選定をめぐる一連のトラブル（選定投票に不正操作があったという申立てを通じて、同選挙区における労働組合の過剰な影響力等がメディアによって報じられた）に求められるとされる。警察にも通報されたこの事件を受けてミリバンド党首は、二〇一三年夏、いわゆる「マシーン・ポリテクス」を終わらせて、党と労組との関係を一終了させはしないけれども一改めると宣言していた。〈<http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-25990591>〉

〔付記〕 本稿は、二〇一四年度日本比較政治学会研究大会報告論文（未定稿）に一部修正を加えた内容である。学会報告では、
討論者から貴重なコメントやアドバイスを戴いた。記して感謝の意を表したい。